連載Vol.19

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを探る

若くして逝去した父、倉田初四郎の長男として十字屋の経営に携わるようになった倉田繁太郎。祖父繁太郎の名前を引継いだ繁太郎が取り組んだ事業に、当時盛んであった16ミリのショートフィルムが挙げられる。おそらく繁太郎の個人的な趣味が高じて事業化されたことは想像に難くないが、昭和初期における新たな十字屋の基盤作りに奔走したことになる。

十字屋映画部と名づけられた新事業部は、アマチュア用の9・5ミリ「小型映画」の販売から映画に関心を持ったようだ。9・5ミリ、16ミリというアマチュア用の規格は、当時「小型映画」と呼ばれ、新しい愛好者層を獲得しつつあった。そこにいち早く目を付け事業化を目論んだ繁太郎は、まずは販売に注力していった。

機材販売の傍ら、映写機のコンテンツ製作にも少しずつ手を広げていった。当初はサイレントムービーのトップスターであった岡田嘉子らを起用した興業映画の製作も行った。娯楽性の高い小型映画は当時大変人気があり、その知名度を見越して製作販売を行っていたが、思惑とは裏腹にまったく売れなかったようだ。

昭和七年になって、映画部の将来を決定づける一人の人材が加わった。それは、小学校の理科教諭であった太田仁吉の入社である。翌年には、太田の女房役と言われたカメラマン鈴木喜代治も入社し、十字屋映画部が本格的に始動しはじめることになったのだ。この二人の参画によって十字屋映画部の方向性は、興業映画路線から教育映画路線へ完全に移行することになったのだ。

太田仁吉が十字屋で最初に手がけたフィルムは「かえる」で、昭和七年に発表をしている。その後、二十三年間に八十二本百十四巻のフィルムを製作した。これらのフィルムのほとんどが理科教材映画であった。

既に音楽事業における教育市場への販路を確立していた十字屋にとって、教育映画普及に向けた教材販売にはさほど苦労はしなかったと思える。しかし、映画の製作には多くの時間と資金が、そして自然現象を相手にした科学映画には、多くの困難が伴ったようだ。

（次号に続く）

（株式会社十字屋　倉田恭伸）

倉田繁太郎。肺結核で享年31歳で逝去。

参考文献　「科学の実験科学映画」　社団法人映像文化製作者連盟ホームページ

連載 Vol.20

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを探る

十字屋映画部の目指した方向性。それは教育と科学という二つのキーワードであらわすことができる。

倉田繁太郎自身、当初はそんなことを微塵も考えていなかったかもしれない。単なる映画好きの三代目として、娯楽の延長線上に事業があったのかもしれない。しかし、事業をスタートすると自分の意思とは裏腹にその事業が大きく成長していくこともある。

そうなると止む無く自分も決心が必要となる。この事業に全てを捧げるか、それとも撤退をするのか。繁太郎のとった選択は、どっちであったのか。

それは前者であった。そのことを表すエピソードとして、16ミリ映画普及会を組織して自ら会長となったことが挙げられる。そしてその普及方法も手間とお金をかけたもので雑誌『映畫教育』を発行して広報に注力したのだ。

なぜ、ここまで注力せざるを得なかったのかは定かではないが、自分が想像する以上に映写機が売れてしまったことに起因するのではないだろうか。

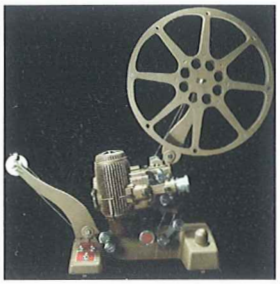
当時十字屋は、東映社という映写機会社に、自社設計仕様のオリジナルの16ミリ映写機の製造委託をしていた。現在でいうOEM生産を行わせていた。主な販路が学校という特定の顧客であったためか、おそらく映写機操作などをなるべく簡素化し、壊れにくくフィルムセッティングもし易い仕様の映写機を製造していたのであろう。特別仕様にしたことによる強みは、圧倒的に学校から支持を得られる反面、弱みとして一般愛好家からの支持は得られないことである。

必然的に学校への納入量が増えれば、他の学校からの問い合わせも増え、学校機材としての標準仕様となり十字屋モデルの映写機が拡販されていくことになった。順調に学校への納入が決まっていく反面、時代は、興業映画やニュース映画が隆盛であった時である。とても授業で使える映像が豊富にあったとは考えにくい。学校への導入は順調に叶ったが、実際の学校での活用にまでは、至っていなかったのだ。繁太郎に対して、学校の先生から多くの意見が寄せられたのは想像に難くない。

予想以上の反響で、映写機が学校に導入されてしまった。しかし、学校の授業で使用できる映像コンテンツは数少ない。この現状に立たされた繁太郎が取った決断として、自分たちでコンテンツを作ろうとなったのが、映画部発足の流れとしては理屈に合うだろう。こうして、十字屋映画部は発足に至ったのだ。

（次号に続く）

（株式会社十字屋　倉田恭伸）



参考写真・16ミリ映写機。本文のメーカーとは関係ありません。

参考文献　「科学の実験科学映画」　社団法人映像文化製作者連盟ホームページ

連載Vol.21

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを探る

映画部の中心的な役割を担ったのは21号でも紹介した太田仁吉、鈴木喜代治、そして配島央二であった。主に映像製作は太田と鈴木が、映画部全体のマネジメントを担当したのが配島であった。

配島央二は、神奈川県山北町出身で小学校を卒業するとともに十字屋に入社した。最初の配属が映画部という縁で繁太郎直属の部下として営業を中心に仕事のイロハを叩き込まれた。配島は、繁太郎の期待に応えるべく、東映社製十六ミリ映写機を売りまくった。その勢いは国内に止まらず樺太、朝鮮、台湾へと拡大させていったほどである。

当時の資料では、この映写機に名前がついていて、商品名は『ベル』、価格は当時一台三七〇円であったようだ。この実績を買われ、十字屋映画部の長として太田、鈴木とともに教育映画の普及に邁進していくことになる。

さて、十字屋映画部のスタッフが最も影響を受けた映像作品は、ドイツのウッファの文化映画やイーストマン・コダック社の理科教材映画シリーズであった。

特にウッファの映像は映画独特の技術による新しい視点で自然を見直している驚異的な作品ばかりであった。植物の成長を微速度撮影でとらえた「植物の神秘」、鳥類の生態を超望遠レンズで狙った「北海の渡り鳥」など、当時としては斬新で画期的であり、そして教育的な作品を多く供給していた。

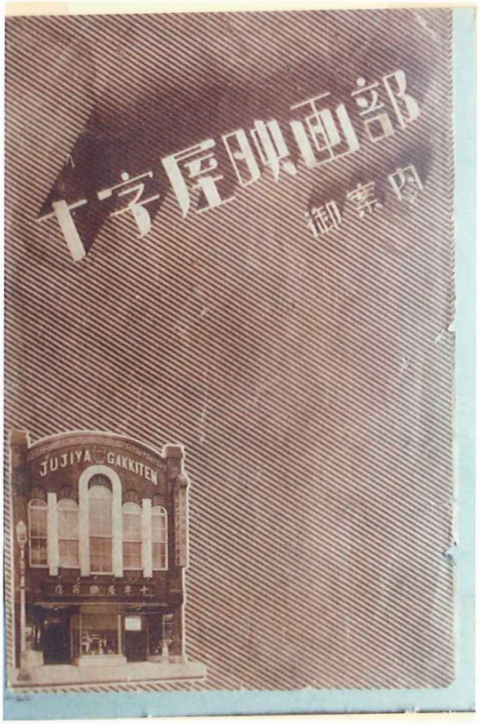
科学映画の方向性の原点はここにあったといえる。科学映画の自主製作に向けた取り組みとして、繁太郎は昭和八年に「十六ミリ映画教育普及会」をつくりその会長に就任した。

そして、事務所を神田一ツ橋教育会館内に設けたのである。教育会館には、若く熱心な教師がよく集まっており、映像を活用した教育方法も大きな関心を持たれていた。

理科教師であり映画好きであった太田仁吉が自然と十字屋と関わるようになるのは、この教育会館でのことであったのだ。繁太郎が意図したかどうかは分からないが、太田と十字屋の出会いはこうして図られたのである。

（次号に続く）

（株式会社十字屋　倉田恭伸）



十字屋映画部のパンフレット表紙

参考文献　「ユニ通信」　岡本昌雄連載記事

連載 Vol.22

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを探る

実際の映画部の実業というのはどうなっていたのであろうか。理科映画の製作をモットーに事業をスタートさせた十字屋映画部は、発足当初からつまずきの連続であったようだ。

理科映画の特徴として、ほとんどが短編である。長くても10分程度の構成で台本が作られていたようなのだが、想像以上に製作には時間がかかった。素人が考えると根気よく山野にカメラを向けて撮影すればそれなりの実写が撮れると思ってしまうが、それではただの記録映像で終わってしまい、映画とはいえないのである。

当時は、理科映画のさきがけであるウッファの映画が既に上映されていた経緯もあり、中途半端な映像を製作することは許されなかった。

そのためか、発足当初から作品はなかなか完成することはなかった。それを裏付けるエピソードとして、カメラマンの鈴木喜代治がこう語っている。

「とにかく、二年近くというものはほとんど作品が出来なかった。撮影しているばかりなんですから…出来上がる作品はないんですよ。」

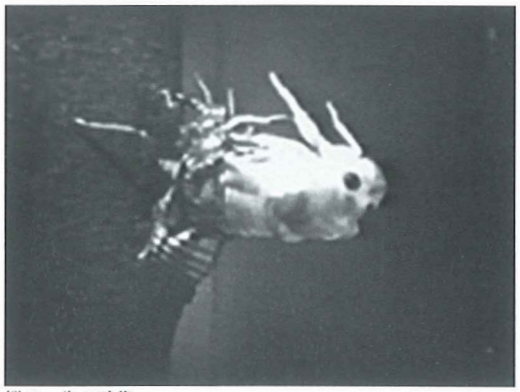
当時製作課長をしていた配島央二も「いったい、いつ写真（映画）ができるんだ」と太田と鈴木に念押しをする毎日が続いていた。

理科映画は短編物が多いためか、常に何本ものタイトルを並行して撮影する必要があった。発足間もない映画部では、最初の三年は我慢の時期であったのであろう。それを裏付ける内容として、製作費の内訳をみてみると、ネガの使用量が通常の映画の撮影に比べて非常に多かったということである。

手探りではじまった理科映画の製作は、困難極まるものであったが、その努力の結果として昭和十一年の一年間でなんと合計十九本もの作品を発表することができたのだ。『血液のじゅんかん』『蝉の一生』『蛙の話』など、この昭和十一年に完成した作品は、後に理科映画の代表的な作品として上映されることになった。

（次号に続く）

（株式会社十字屋　倉田恭伸）



蝉の一生の映像
成虫になる過程を根気よく撮影した。

参考文献 「ユニ通信」 岡本昌雄連載記事

連載 Vol.23

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを探る

三代目倉田繁太郎について主に教育映画の立ち上げと普及について紹介をしてきた。今回は、この三代目の短い人生について紹介をしていきたい。

明治四十三年五月 倉田初四郎の長男として東京府に生まれた。現在の弊社会長である倉田槇の長兄にあたる繁太郎であるが、父である初四郎と同様で早世であった。昭和十四年四月三十日にこの世を去っている。享年三十歳。死因は、当時流行していた肺結核によるものであった。

三代目繁太郎の前名は「右衛門」といった。初代倉田繁太郎の父の名が六右衛門であったことから、長男に「右衛門」と命名したのであろう。大正十二年に初代繁太郎が死去したため家督相続をし、改名した。厳密に言うと「繁太郎」の襲名は二代目となるが、倉田家三代目当主としての位置づけとしてご理解いただきたい。

東京府立第一商業学校（現東京都立第一商業高等学校）を卒業の後、父祖の遺業を継ぎ十字屋楽器店の店主となり経営に携わることになった。十字屋への入社は十九歳であったようだ。祖父、父共に亡き後の十字屋の経営は、初代繁太郎の次男で初四郎の弟である倉田菊次郎が社長として奔走していた。その傍らで、三代目当主として繁太郎は実務の修行とともに、新しい事業の構築に注力していた。

その成果として、大きく二つの功績を残したとされている。一つは前述している十六ミリ教育映画の製作と配給、そしてもう一つは、洋楽とレコードの月刊誌「音楽新潮」の発刊にも大きく関わっていたことだ。この「音楽新潮」の発刊は大正十三年二月であったことから、まだ繁太郎は現役の学生であったと推測される。しかし、十字屋の当主（オーナー）という立場で名義発行者として発刊に深く関わっていた。実際の編集に際しても、持論を展開するなど積極的に関与していたと言われている。

三十歳という短い人生であったが、花火のごとく果なくまた燦然たる功績を遺しつつ、太く短い充実した生涯を送った人であった。

（次号に続く）

（株式会社十字屋　倉田恭伸）

在りし日の倉田繁太郎

参考文献 「音楽新潮」 岡本昌雄連載記事

連載 Vol.24

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを探る

前号では三代目倉田繁太郎の紹介をしてきた。その繁太郎の父初四郎については十八号で少し触れてきたが、その続きを紹介したい。

楽器屋としての十字屋の礎を作ったのは、倉田初四郎であった…といっても過言ではないだろう。二代目を襲名する前に亡くなってしまったため、資料や文献があまり残っていないのだが、父繁太郎の教えである「卸に徹しろ」を行動で示し、楽器屋としての基礎を作った人物であった。

明治三十九年にアメリカより帰国。帰国当初は、紙腔琴の販売や、西川オルガンの販売も手がけていた。明治の後半になると西川オルガンとの確執なども発生したが（※十九号を参照）、事業意欲盛んであった初四郎の参画は、幅広い楽器の取り扱いをする楽器屋への変貌を促進するエンジンとなっていた。

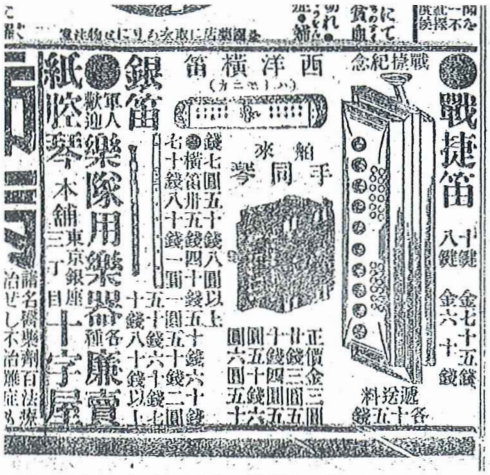
米国での経験を生かしてまず初四郎が取り組んだのが、仕入改革であった。当時大阪の商社を通じて輸入していた楽器を、直接輸入という手法で横浜港をベースとした取引に変えた。これによって、商社へ支払う中間マージンや大阪東京間の楽器の運搬費の削減など、大幅なコストカットを実現した。

反面、大変な苦労となったのが、外貨の獲得であったとのことだ。商社を通じれば円での仕入が可能であった。しかし、手数料は莫大となって原価を押し上げていた。それを回避する意味で、初四郎はアメリカへ行って外貨の獲得に奔走した部分もあったのだ。日本からはいろいろな物資を運び、市場で売りさばくことでドルを調達していたのだが、帰国をしてしまってはそれもできない。

日露戦争の最中、日本という国自体が外貨不足であった時代。日本政府は戦争の決断をするも経済的にも技術的にも自国で戦費や生産をまかなうことはできなかった。そのため最新鋭の軍備を用意するにも外国からの輸入に頼らざるを得なかったのだ。しかし、それらの購入資金は、輸出産業も確立していない農業国にとって紙屑当然の円では到底まかなえなかった。そんな中、何とか英国での戦時国債発行で外貨の調達をまかなっていた世相を鑑みると、初四郎がどのように外貨を調達していたかは今となっては謎である。

（次号に続く）

（株式会社十字屋　倉田恭伸）



明治三十九年頃の新聞広告。戦捷笛の見出しは日露戦争という時代背景を感じさせる内容になっている。